

ダニエル書1章8-21節 「流れに抗う信仰」

1A 信仰の試練 8-16

1B 心定め 8

2B 神の守り 9-16

2A 世に仕える神のしもべ 17-21

本文

ダニエル書を開いてください。私たちは今晚、1章8節から21節までを見ていきたいと思えます。私たちは、前回、ダニエルと三人の友人が、バビロンに捕え移されて、王に仕えるため三つのことをさせられたところを読みました。一つは、「カルデア人の文学とことば」を教わったことです(1:4)。次に、「王の食べるごちそうや王が飲むぶどう酒から、毎日の分を彼らに割り当てた。」とあります(1:5)。そして最後に、それぞれの名前が、神をあがめるユダヤ人の名前から、バビロンの神々をほめたたえるバビロンの名前に変えられたことです。

こうして、エルサレムから捕え移され、捕え移されただけでなく、バビロン人に改造させられるための道を歩まされていたのですが、私たちは前回、そこに希望があることを見ました。「主」が、これらのことをお許しになられているということです(1:2)。ですから、エルサレムから離れたから、神からも離れたのではなく、神がバビロン捕囚を行われたのですから、神が囚われの地で、共にいてくださるという希望もあります。私たちは、自分には不本意だと思ふようなところにいるかもしれませんが、しかし、そうされたのは、紛れもなく主ご自身なのだということを知ると、自分の置かれているところが、まさに聖域であり、まるで神の文化とはかけ離れているようなところでも、主にお伝えしているという自負を持てます。

1A 信仰の試練 8-16

しかし、いや、それゆえに、神は試練もお与えになります。それは、神の証しをするための試練と言ったらよいでしょうか？異教の文化や習慣の中に生きていく中で、それでも自分は神の民なのだという証しを立て、神が彼らの神々よりも優れていることを示されるという証しです。

覚えていますか、ヤコブの息子ヨセフは、兄たちによってエジプトに売られましたが、そこで侍従長に仕えていました。主がともにおられたので、ヨセフにその家の全財産が任されました。しかし、侍従長の妻に言い寄られました。ヨセフは妻に言いました、「創世 39:9 そのような大きな悪事をして、神に対して罪を犯すことができるでしょうか。」彼は、エジプト語を話し、エジプト人の恰好をしていました。そして主人を尊敬し、主人に信頼されていました。その中で、神のみこころを損なわせるような罪への誘いが、自分の目の前に出てきたのです。ヨセフは、主が遣わされたエジプトにい

ると知りつつも、主の明確なみこころ、罪だとしていることとの一線を知っていました。その罪を拒んだために、彼は牢屋に入れられました。義のゆえの迫害です。けれども、主はご計画を持っておられ、実はその困難が、自分がエジプトの総理大臣になる道筋、そして父の家族を飢饉から救う道筋の中にあっただと後で知ったのです。

このダニエルと友人三人も同じです。先ほど話した、三つのことがありました。その中で、バビロンの文学とことばを学ぶことは、拒みませんでした。バビロンの文学とは、バビロンの神話が大半です。ですから、まさに異教の話ですね。そして、自分たちの名前が変えられることも、拒みませんでした。自分たちの名前が変えられることによって、自分の中身も変わるわけがないからです。けれども、王のごちそうやぶどう酒を食べたり、飲んだりすることは、明らかな神に対する罪だったのです。なぜ罪だったのかは、おって説明します。

ここでまず大事なものは、神のことば、また福音に明らかに反していることというものの以外に、自分たちが壁を作ってはいけないということです。日本の文化や社会に生きていれば、自ずと異教の慣わしとのつながりがあります。また、学校や職場においては、反キリスト的なことが行われていることさえあります。しかし、それらにいちいち、拒み、距離を取って良いのでしょうか？おそらく、この日本から、この世から物理的に出て行かなければいけません。例えば、学校の教育で進化論などを子供に教えられのはいけないとして、全く進化論を知らないままでいたらどうでしょうか？将来、科学の世界で証しを立てる人がいなくなってしまう。ある意味で科学の世界では、進化論は受け入れられている理論ですから、信じていなくとも、受け入れていなくとも、知っていないとやっていけないのです。進化論によって、神を信じなくなるというのなら、それは不信仰という罪ですが、進化論を知ること自体は、罪ではありません。同じように、例えば日本の文化であれば、古事記などの日本建国の神話があります。また日本の歴史は仏教なしに語ることはできません。また、先祖供養はしませんが、聖書の中では先祖を敬うことはとても大事にされています。ですから、文化や伝統を知ること自体は、決して罪ではありません。

異教や世に対して遣わしているのは、神ご自身なのです。福音ではない他のことで、人々に不必要な軋轢を生じさせ、福音を聞くことから遠ざけてしまいます。はっきり、罪であると見なされること以外については、神にお任せし、それぞれの確信に任せることが必要です。

1B 心定め 8

⁸ ダニエルは、王が食べるごちそうや王が飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定めた。そして、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願うことにした。

ダニエルは、自分の名前が異教の神のついた名に変えられることも、バビロンの文学やことばを学ぶことも、それはよしとしました。けれども、「王が食べるごちそうや王が飲むぶどう酒」は自分の

身を汚す、一線を越えているとみなしました。

律法の中に、このようなものがあります。「出エジプト 34:15 あなたはその地の住民と契約を結ばないようにせよ。彼らは自分たちの神々と淫行をし、自分たちの神々にいけにえを献げ、あなたを招く。あなたは、そのいけにえを食べるようになる。」私たちの現代では、ここに書かれていることの意味合いが難しいと思います。神々と淫行をするとは、霊的な意味と、肉体的な意味のどちらもあります。霊的な意味では、まことの神においても、神々と呼ばれている存在においても、交わるということは、契りを結ぶこと、妻が男と結ばれて一体となるのと同じように捉えます。霊において一つになるのです。ですから、まことの神以外の神々にいけにえを献げることは、それらの神々と淫行を行っていることとみなすのです。パウロが、偶像の宮に献げている肉についてこう述べています。「I コリ 10:20 むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」偶像に献げることは、物理的なことだけでなく、霊的にもつながりができることを知らないといけません。

そして肉体的にも淫らなことをしているというのも、そうなのです。神殿の祭司、女祭司というのは、実は神殿男娼、神殿娼婦であります。そして性的に倒錯した行為を、それらの神々に献げる行為とみなします。言葉で表現できないほどの忌まわしいことを行います。ですから、神々にいけにえを献げることは、悪霊的な部分もあるし、性的逸脱の部分もあるのです。そういった背景があって、主は、「彼らは自分たちの神々と淫行をし、自分たちの神々にいけにえを献げ、あなたを招く。あなたは、そのいけにえを食べるようになる。」ということ避けるように言われているのです。

バビロンには、主神マルドクなど、神々がいます。王の食べる食事は、これらにまず、献げられています。ですから、王のごちそうは、必ず肉はマルドクに献げられていることが明らかです。そこでダニエルは、肉を食べたら、偶像礼拝の罪を犯すとみなしたのです。他のことは受け入れても、これは直接的に、主に対する罪であると知っていたのです。ぶどう酒についても同様に、まず偶像にぶどう酒を注いで、それから残りを出してくるので、こちらも偶像礼拝になるのです。

新約の時代も、バビロンとは地理的に遠い、ギリシアとローマの世界においても、肉を食べる時にはまず、偶像に献げるという習慣がありました。ですので、市場で売られている肉について、また客に招かれた食事について、このように指導を与えています。「I コリ 10:25-29 市場で売っている肉はどれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。26 地とそこに満ちているものは、主のものだからです。27 あなたがたが、信仰のないだれかに招待されて、そこに行きたいと思うときには、自分の前に出される物はどれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。28 しかし、だれかがあなたがたに「これは偶像に献げた肉です」と言うなら、そう知らせてくれた人のため、また良心のために、食べてはいけません。29 良心と言っているのは、あなた自身の良心ではなく、知らせてくれた人の良心です。私の自由が、どうしてほかの人の良心によってさばかれるでしょう

か。」肉そのものに罪があるのではなく、心の良心を清く保っていることが大事です。

以前、私たちの教会では、友達の教会と一緒に、キリスト教の葬儀社の方をお招きして、仏式におけるキリスト者の態度について学びました。そこにある様々な儀式や習慣があります。その意味を知って、偶像礼拝に当たると思われる者は避け、そうでないものには、遺族への慰めをするために働きかけるための、いろいろな具体例を挙げていただきました。どこまでが参加でき、そしてどこからからかが罪を犯すことになるのか、その線引きをしっかりとしておくべきです。

ここに、「心に定めた」という言葉があります。これが、このダニエル書の全てと言っても過言ではありません。自動車のアクセルを踏んで、点火してエンジンが作動する、その点火の部分です。それがなければ、すべてが始まらないのと同じように、ダニエルと友人たちの証しは、「心に定めた」というところから全て始まります。心に置いてしまって、そこから離れないことです。どうしようかな、と思えばぐねるのではなく、もう決めてしまうのです。ある牧師さんが、私が結婚するかどうか決める時に教えてくれましたが、結婚した後に、「この人がみこころだったのか？」と考えること自体が、もう論外であり、そんな思いは滅ぼしてしまわないといけないかのような、ことを言っていました。結婚は、死が二人を別つまでの決断です。それと同じように、主から命じられたという理由だけで、それで決めることです。

反対が何かと多い、キリスト者の信仰です。そこで大切なのは、心の中でキリストを主とあがめることです。「I ペテ 3:14-15 たとえ義のために苦しむことがあっても、あなたがたは幸いです。人々の脅かしを恐れたり、おびえたりしてはいけません。15 むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。」心の中でキリストを主としていることです。主とするということは、そこに理由がありません。主がそう言われるのは、主が言われるのだから聞き従うのです。これこれの条件があるから、従います、ではありません。従うのです。

日本には、「出る杭は打たれる」という言葉があります。あるいは、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」でしょうか。全体の流れに抗うことは、実に苦手です。けれども、先ほどの仏式についてのこともそうですが、だんだん分かって来ました。日本の中で、キリスト者が迫害を受けていないのは、おそらく、迫害を受ける前に忖度して、自分から流れに合わせているのです。これこそ、やっちはいけないことをやっています。この前の日曜日に、ローマ 12 章 2 節で「この世と調子を合わせるとはいけません。」と、習ったばかりですね！キリスト者になったということで、すでに杭は出てしまうのです。その杭をまたひっこめても、キリスト者であれば出たままです。これは惨めな生活です。信仰を持っていても、実質、世の人と変わらなくなってしまう。

そうではなく、日本社会の中では、「出過ぎた杭は、放っておかれる」ということわざも、当たって

いるということです。あまりにも価値観や常識が違う人に出会うと、かえって尊重してくれるんですね。「あの人は、良く分からない。でもこれを信念にしているから、受け入れるしかない。」と恵みを働かせてくれるんです。「あの人は、キリストの人みたいだから、放っておこう。」として、葬儀で焼香もたかないし、遺影の前で深くお辞儀もしない私を放っておいてくれるのです。その代わりではないですが、私は生きたご遺族の方々には深々と礼をします。礼儀は尽くして、でも偶像礼拝には参加しないのです。拒むということだけでなく、何かをするということも合わせて証しを立てます。

身を汚さないようにさせてくれと、「宦官の長に願うことにした」とありますね。彼は願っています。主張していません。権利を振りかざしていませんし、高圧的でもありません。ここで、殺されても構わないとして抵抗したり、抗議してもいません。ここが大事です。ダニエルは、上に立つ人たちは、神によって立たされているのだという権威を認めていたのです。すべての人を敬っていたのです。私たちが次週、礼拝において学ぶローマ 13 章です。「13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」

ペテロも同じことを話しています。「I ペテ 2:16-17 自由な者として、しかもその自由を悪の言い訳にせず、神のしもべとして従いなさい。17 すべての人を敬い、兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を敬いなさい。」このことばは、大事です。私たちはキリストにあつて自由にされた者たちです。けれども、その自由を、神に従うために用いていきます。神に従うとは、キリストの愛にとらわれることです。この方の愛にとらわれて、それで自分の持っているとされる自由や権利を降ろすのです。そして、「すべての人を敬い」とあります。すべての人がある意味で、神が理由があつてそこに置いておられる人々です。キリスト者は、すべての人に一定の敬意を持っている人々です。そして、兄弟は、同じ神から生まれたのだから愛していきます。そして、神を恐れて、王を敬います。神が立たされた権威者であるからこそ、その王を敬うのです。

今の時代にとても大事な教えです。政治的に相いれない指導者を、私たちは敬うべきか？敬うことができるのか？はい、できます。いいえ、敬わないといけません。その人が何をしているのかは関係ないのです。ペテロとパウロが敬えと言っている王は、後に、彼ら二人に死刑を下す、ローマ皇帝ネロです。彼は悪霊つきとまで言われた、気違いになった王です。キリスト者たちを、ローマの街中に、生きたまま十字架につけて、火をつけて、街灯がわりに使ったのです。それでも、敬えというのです。

ネブカドネツアルは、世界でも名高い独裁者です。とんでもない横暴な王でした。実に、ダニエルが解き明かした夢によって、ネブカドネツアルは懲らしめられます。けれども、ダニエル自身は王を敬っていました。これは、証しのためなのです。その国で人々が救われるため、また王自身が救われるためです。「I テモ 2:1-4 そこで、私は何よりもまず勧めます。すべての人のために、王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。2 それは、

私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。3 そのような祈りは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることです。4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」

ダニエルは信頼関係が出来ていました。宦官の長を敬い、また彼もダニエルのことを信頼していました。その中で初めて、自分たちの良心に従った願いを立てることができます。その信頼関係がないがしろにして、権利をふりかざすのであれば、御心ではありません。こういったことも、世の終わりに生きるキリスト者として、ダニエルから学ぶことができるのです。

2B 神の守り 9-16

⁹ 神は、ダニエルが宦官の長の前に恵みとあわれみを受けられるようにされた。

神を畏れ、上に立つ人を敬うところには、神ご自身が恵みと憐れみを信じる者に与えてくださいます。ここに、宦官の長の心を動かしたのは、主ご自身です。この方に明け渡すのであれば、主が責任を取ってくださいます。自分を主のものとすることによって、主が全てのことを私たちのために動かしてくださいます。

聖書には、異教の王などに好意を与えてくださる神の働きを見ます。先ほど話したヨセフですが、監獄に入れられましたが、「創 39:21 しかし、【主】はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。」とあります。彼は他の囚人の世話を任されました。当然ながら鍵を持っているのですが、彼は脱獄しませんでした。監獄の長を敬っていたことがよくわかります。ネヘミヤが、ペルシヤ王アルタシャスタの献酌官であった時に、エルサレムに一時帰還する申し出をしましたが、王はそれを許しました。「2:8b わが神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくださった。」主は、王の心や、上に立つ人々の心を、ご自分の思われるままに動かされます。私たちがすべきことは、敬うべき人に敬いを示すということです。

¹⁰ 宦官の長はダニエルに言った。「私は、あなたがたの食べ物と飲み物を定めた王を恐れている。あなたがたの顔色が同年輩の少年たちよりもすぐれないのを、王がご覧になるのはよいことだろうか。あなたがたのせいで、私は王に首を差し出さなければならなくなる。」

宦官の長は、もっともな恐れを抱いています。「王に首を差し出さなければならなくなる。」とは、文字通りにそうなる、ということです。2章以降を読むと分かりますが、ネブカドネツアル王は、命令に従わなければ、手足を切り離させ、家はごみの山とさせる、と言いました。3章では、ダニエルの友人たちを燃える火の炉の中に投げ入れました。ですから、宦官の長の恐れはもっともなものです。そこでダニエルは、宦官の長に寄り添いました。むやみに要求したのではなく、自分も知恵を尽くして宦官の長と共に解決法を考えました。

¹¹ そこでダニエルは、宦官の長がダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤのために任命した世話役に言った。¹²「どうか十日間、しもべたちを試してください。私たちに野菜を与えて食べさせ、水を与えて飲ませてください。¹³ そのようにして、私たちの顔色と、王が食べるごちそうを食べている少年たちの顔色を見比べて、あなたの見るところにしたがって、このしもべたちを扱ってください。」¹⁴ 世話役は彼らのこの申し出を聞き入れ、十日間、彼らを試した。

十日間、野菜だけを与えて私たちを試してください、とお願いしたのです。そうすれば、宦官の長の恐れも解消でき、宦官の長は、ダニエルの願いを聞くこともできます。ヤコブは手紙の中で、知恵を求めるように勧めました。「ヤコブ 1:5 あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。）」知恵は、世渡りが上手ということではありません。聖書にある知恵とは、相対立する状況がある時にその中でも平和をもたらすことのできる言葉や考えであります。「ヤコ 3:17 しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。」

こうしてダニエルは自分と友人らに、信仰による試験を課しました。「十日間」という数字は、試される時に出て来ます。かつてバビロンによってエルサレムが滅んだ後に、残るわずかなユダヤ人たちがエジプトに下ろうとしていた時、エレミヤに主の御心を求めました。エレミヤは主に伺って、それで十日たってからようやく、主から答えがありました。下ってはならないということですが、実は彼らはすでにエジプトに下ると決めていましたね。このように、試される時です。他に、スミルナの教会に対するイエス様の言葉があります。牢に投げ入れられて、「黙示 2:10b あなたがたは十日の間、苦難にあう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」とイエス様は言われました。試される期間ですが、けれども言い換えると、それは一時的で、終わりが来るということです。永久にそのような状態ではない、ということも意味します。

¹⁵ 十日が終わると、彼らは、王が食べるごちそうを食べているどの少年よりも顔色が良く、からだつきも良かった。¹⁶ そこで世話役は、彼らが食べるはずだったごちそうと飲むはずだったぶどう酒を取り下げ、彼らに野菜を与えることにした。

主は、彼らのご自分への信頼に応えてくださいました。人間にはできないことを、ご自身がしてくださいました。その肉体を強めてくださったのです。

このように、私たちが主に忠実であれば、主が守ってくださいます。ダニエルたちのように、すぐにその救いの手が与えられることもあります。けれども、後に救いの御手が伸びることもあります。ヨセフのことを思い出してください。先に引用したように、侍従長の妻が言い寄って、彼は神を恐れて、その場から逃げました。ところがその良心のゆえに行為に対して、対価は監獄でした。二年間

の懲役でした。しかし、二年後にはその苦しみから救ってくださったのです。ファラオの前に出て行き、エジプトの総理大臣にしたのです。そして、兄たちと和解することができ、父ヤコブの家族を飢饉から救ったのです。時差はありこそすれ、主はヨセフを守ってくださったのです。

ダニエル書は、神への信頼にともなう救いの証しがこの他にも出て来ます。友人たちが燃える火の炉から救われました。ダニエル自身が、獅子の穴から救われました。6章23節には、「彼が神に信頼していたからである。」とあります。パウロが、小アジアで受けた苦しみについて話している時、それは耐えられないほどの圧迫で、命さえも危うくなると言っています。そしてこう言いました。「2コリント 1:9-10 実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。10 神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。」

2A 世に仕える神のしもべ 17-21

¹⁷ 神はこの四人の少年に、知識と、あらゆる文学を理解する力と、知恵を授けられた。ダニエルは、すべての幻と夢を解くことができた。

4節において、四人の少年には、すでに「あらゆる知恵に秀で、知識に通じ、洞察力に富み」とありました。すでに、与えられている能力がありました。けれども、神は加えて、ご自身の御霊による知識と理解力と、知恵をくださいました。ここは大事な点です。神が、前もって与えておられる能力というものはあります。けれども、主に仕えるということにおいて、神の御霊の賜物があってこそ、人々への証しを立てられます。

世に証しを立てた人々の話を聞きますと、それが大きく見えてきますね。例えば、今は五輪が行われていますが、「炎のランナー」という映画があります。そこには、伝道師であり、中国への宣教の決意までしていたエリック・リデルがいます。彼は、パリ五輪での100メートル予選で、日曜日に重なること知り、辞退を申し出ます。ぎりぎり、他の選手が400メートルの枠組みを譲ると言ってきて、種目変更を直前にしました。そして、彼は晴れて、400メートル競争で優勝を手に入れます。このように、元々、彼には走る能力は与えられていましたし、彼は努力家でしたが、神がその時に与えられる賜物、力があります。

そしてダニエルにだけは、超自然的な賜物も与えられました。「ダニエルは、すべての幻と夢を解くことができた。」これが、これからダニエル書を動かしていきます。ネブカドネツアル王に対しての証し、ベルシャツアルに対しての裁きの宣言、その後、数々の幻が与えられ、世の終わりに向かう超大国の興亡、そして神の国の到来を預言します。

ところで、私たちにも夢や幻が与えられるのでしょうか？ダニエルのようにではないですが、与えられると私は信じています。ダニエルのようにではないというのは、普遍的な、神のことばとしての啓示は与えられません。それは黙示録によって完結しました。けれども、個人的な、限定されたものであれば、励ましと慰め、建徳のために与えられます。ペテロが、すべての信者に御霊が注がれる時に、夢や幻が与えられることを、ヨエル書から引っ張って論じました。「使 2:17 『神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。』

¹⁸ 少年たちを召し入れるために王が命じておいた日数が終わったので、宦官の長は彼らをネブカドネツアルの前に連れて行った。¹⁹ 王が彼らと話してみると、すべての者の中でだれもダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤに並ぶ者はいなかった。そこで四人は王に仕えることになった。²⁰ 王は、知恵と悟りに関わる事柄を彼らに尋ねたが、彼らがそのすべてにおいて、国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっていることが明らかになった。

日数は一年ぐらいだったのでしょうか、2章ではネブカドネツアルの治世の第二年の時、1章は彼が王になって間もなくの時でしょう。一年ぐらいだったのだと思います。そして、王の前で口述試験を彼らは受けました。その結果、彼らが最も優秀であることが明らかでした。そこで王は、他の少年たち以上に王の任務に就かせることにしました。

そこで実際に、王が自分のしていることで彼らに尋ねると、その知恵と悟りが、「呪法師、呪文師よりも十倍もまさっている」ことが分かりました。十倍とありますが、これは、試すという意味合いがあることを先ほど見ましたね。彼らは、幾度もいろんなことを試されて、確かに圧倒的に他の知者よりも優れていることが明らかにされたのです。私たちも、信仰者はその信仰の真価が、あらゆるところで試されます。それを経て、これが真実だと明らかにされるのです。

そして、「呪法師、呪文師よりも」とありますね。今の考えだと驚くべきことですが、古代の国々は、政策担当者にこのような呪法、呪文を使っていました。呪法は、エジプトで使われていた星占いのようなものです。呪文は占いです。出エジプト記の時代に、魔術師がファラオの横にいたことを思い出してください。このように、横に着いていたのです。そういう者たちの中で彼らは働いていました。もちろん、彼ら自身がそれを行っていません。しかし、そのようなオカルト的と言ってもよい状況のなかで、さらにすぐれた知恵と理解力、判断力が与えられていたのです。その中で、ダニエルも、夢と幻が与えられていました。

ここでも、ぎりぎりのところでの証しであります。悪霊が行っているであろう呪法や呪術が満ちている中で、それでも神の御霊によって証しを立て続けたのです。むしろ、その分野において、はるかに予見と予知に優れている、神の啓示を受け取って、それを語っていったのです。

繰り返しますが、今や知られているキリスト者の証しは、世においてもよい功績を残しました。例えば、日本ではキリシタン時代、キリシタン大名の高山右近は、秀吉の家来でしたが、彼は秀吉に武将として高い評価を得ていました。秀吉がいやがったのは、唯一、彼の一途な信仰心だったのです。しかし、嫌だなと思っても、それでも、秀吉には引き付けられるものがありました。簡単に手放すことができない人材だったのです。戦国時代と言え、殺し合いは当たり前、いくらでも批判しようと思えばできたでしょう。けれども、彼は、それでも秀吉に寄り添い、仕えて行ったのです。ある人が言いました、「仕事において、チームの中で一緒に泥を飲め。そうして初めて、自分のキリスト者としての思いを、職場の人たちは信頼して、聞いてくれるのだ。」と。

神がついておられます。自分の上司、上に立つ人たちを敬ってください。そして、罪に対して妥協しない所で、神が必ず補い、満たし、溢れさせてくださいます。